

# 2

Rd.

APR 2013

平成25年5月30日発行

# RACING PRESS

*apan*

**SUPER GT ROUND 2  
FUJI**





Super GT  
Series 2013

GT

Round 2

FUJI

4/28-29

Text

鳥村元子

Editor

吉川納恵

Photo

鉄谷康博

加藤智充

中村佳史

Cover Photo

鉄谷康博

Special Thanks

榎原寿雄

小澤克仁





# ホームコースの富士スピードウェイで、レクサス勢が上位を独占!

第2戦を迎えたSUPER GT。今回は大型連休の前半、4月28、29日に静岡・富士スピードウェイで500kmに及ぶ長距離レースが行われ、予選でもライバルたちを蹴散らしたレクサス勢が決勝でも上位を席巻する展開となった。

レースウィークは吹く風こそやや冷たいものの、終日、富士山の勇姿をサーキットから眺めることができるレース日和に恵まれた。まず予選でトップタイムをマークしたのは、No.36 PETRONAS TOM'S SC430(中嶋一貴/ジェームス・ロシター組)。前回開幕戦の岡山ではまったくと言っていいほどいいところがなく、ノーポイントに終わったが、今回は見事な速さでライバルを圧倒。朝の公式練習こそ同じSC430のNo.38 ZENT CERUMO SC430(立川祐路/平手晃平組)にトップを譲ったが、予選ではQ1でSC勢トップの2番手につけ、続くQ2では2番手に0.392秒差でトップタイムをマーク。チームにとって2004年以来となるポールポジション奪取を成功させた。2位には昨年の富士ウィナー、No.39 DENSO KOBELCO SC430(脇阪寿一/石浦宏明組)が続き、3番手にはディフェンディングチャンピオンのNo.23 MOTUL AUTECH GT-R(柳田真孝/ロニー・クインタレッリ組)が続き、実力伯仲の戦いに期待が集まった。



GT500





決勝日の朝も青空が広がる快晴。だが、決勝を前に少し薄曇りの天候へと変わったが、終始安定したコンディションの下、様々なバトルを盛り込んだ500kmの戦いが繰り広げられた。まず、予選上位2台が激しいバトルを展開、一方で、3位スタートを切った23号車が序盤にマシントラブルに見舞われて戦線離脱という思わぬ様相を見せた。ライバル勢と異なるタイヤ選択をした39号車は1回目のピットインを早いタイミングで実施。これでも中盤はトップで周回を重ねることになったが、2回目のピットインではライバルたちより多くの補給時間が必要となり、首位から陥落。そこで代わってトップに返り咲いたのが36号車だった。終盤には、ベテラン立川が操る2位の38号車がじわりじわりとその差を詰めてきたが、36号車の中嶋は冷静に応戦を続け、ミスなく周回を続けて立川に攻撃のチャンスを与えない。結果、36号車が完璧なレースを完遂し、500kmを走破。中嶋、ロシターとともにGT500初勝利を果たし、またチームにとっては2010年第8戦以来の優勝を遂げるようになった。2位の38号車に続いたのは、No.6 ENEOS SUSTINA SC430(大嶋和也/国本雄資組)。新コンビが3位をゲットした。4位にも39号車が続き、SC430がトップ4を独占。まさに“レクサス祭”の週末となった。

GT500

#### GT500 決勝結果

優勝 No.36 PETRONAS TOM'S SC430 中嶋一貴 / ジェームス・ロシター  
 2位 No.38 ZENT CERUMO SC430 立川祐路 / 平手晃平  
 3位 No.6 ENEOS SUSTINA SC430 大嶋和也 / 国本雄資



# ハイブリッド車が大躍進！ Panasonic apr PRIUS GT が初優勝！

予選でトップタイムをマークしたのはNo61 SUBARU BRZ R&D SPORT (山野哲也/佐々木孝太組)。開幕戦に続き2戦連続で活躍を見せることになった。さらに、2、3位にはハイブリッド車のHonda CR-Z GTが続き、決勝での活躍が注目された。



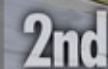
GT300



決勝では、61号車がまさかの駆動系トラブルでいきなり失速。3周で戦いから去ると、序盤はFIA GT3車輛が台頭し、レースを盛り上げる。しかし、そんなライバル達を尻目に後続との差を作り上げたのが、No.16 MUGEN CR-Z GT (武藤英紀/中山友貴組)。まったくのひとり旅状態で初優勝にひた走った。ところが好事魔多しとはこのことか。レースも大詰めを迎えた頃、16号車が予定外のピットイン!トラブル発生かと思いきや、タイヤ交換のみでピットを離れる。タイヤからの振動が激しく、トラブル回避のためにピットに戻ったものの、拾ったタイヤカスがその原因だったとわかったが、すでに時遅し。後方から諦めず周回を重ねていた同じくハイブリッド車のNo.31 Panasonic apr PRIUS GT (新田守男/嵯峨宏紀組)がトップに浮上。同じGT300クラスの3位以下を周回遅れにする力強い走りで見事フィニッシュ!ハイブリッド車に初優勝をもたらすという劇的な結果で戦いの幕を下ろすことになった。



Audi



2nd



3rd

#### GT300 決勝結果

優勝	No.31	Panasonic ape PRIUS GT	新田守男/嵯峨宏紀
2位	No.16	MUGEN CR-Z GT	武藤英紀/中山友貴
3位	No.86	クリスタルクロコランボルギーニ GT3	山西康司/細川慎弥





THE WINNER  
CLOSE-UP

## No.36 PETRONAS TOM'S SC430

Text by Motoko Shimamura

Photo: Yasuhiro Tetsutani / Yoshifumi Nakamura / Tomomitsu Kato

### 世界を股にかける多忙なドライバーが、 チームに3年ぶりの勝利を届ける

今シーズン、レクサスSC430を駆る36号車PETRONAS TOM'Sは、ドライバー編成を変更。元F1パイロットの中嶋一貴はそのままに、ニューカマーのジェームス・ロシターを新たに起用した。チームは、脇阪寿一&アンドレ・ロシターというゴールデンコンビで2009年にシリーズチャンピオンを獲得。翌年同ドライバーがランキング2位に入るなど、華々しい歴史が輝く。だがここ数年はあと一歩で勝利を逃すなどの苦しいレースが続いていた。

今シーズン、戦力のボトムアップを果たしたSC430。その中でもトップクラスの速さを第2戦の富士で披露したのが36号車だった。レクサスお膝元での勝利が期待される状況で、トップタイムをマークしたのは、中嶋。自身としてはGT500で初めての、そしてチームとしては2004年以来、9年ぶりのポールポジション獲得に成功した。

一方、パートナーを組むロシターも日本でのレースは初年度ながら、高い吸収力をもってSC430をドライブ。S-GTならではの巧みな駆け引きにも適応する実力の持ち主だ。ルックスも良く、新たなレースファンも増えることだろう。

第2戦のレースは500km。ドライバー交代2回を含む長丁場だ。36号車は、序盤から速さにモノを言わせてレースを牽引。セオリーどおりのルーティンワークをキチンとこなし、策略を練るライバル勢の猛攻をシャットアウトする。しかし敵も手強く、終盤に入ると38号車のZENT CERUMO SC430が詰め寄り、再び激しいバトルになるかと思われた。

ところが、今回、それぞれが装着していたタイヤの種類が異なり、38号車はすでに限界が近づくタイヤをなんとかコントロールしていたこともあり、万事休す。安定した速さを最後までキープし続けた36号車が勝利をモノにした。これでチームは2010年以来的勝利に酔い、中嶋、ロシター両ドライバーは、GT500初勝利という大金星を手にした。





THE WINNER



# Special Eye



Photo by: **Hisao Sakakibara**





# Special Eye

Panasonic Panasonic Panasonic

Photo by: **Katsuhito Ozawa**